
乙女は白百合の箱庭に

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女は白百合の箱庭に

【NZコード】

N8249X

【作者名】

赤眼鏡の白チョーク

【あらすじ】

「美弥ー」「何智由」「…大好き」とある女子校の日常。ほんのり百合。ギャクありシリアルスあり。完全作者趣味。のんびり更新していくます。よければお読みいただけたらと思います。ただ今シリアルス突入しました

「ね、ね、美弥」

「何?」

「見て、我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんだ」

「…」

「微笑ましいな、麗しいな、何話してるんだろう。ね、何話してると思つ?」

「毎日、飯の話?」

「…や、うん。確かに弁当食べながら話してるけど…」

「智由、これさつきの授業をまとめたノート」

「え! ありがとー! サつきから何書いてるのかと思つてた」

「四時限目、智由寝てたから」

「えーよくわかったね。ハゲ…じゃなくて森元先生にもばれなかつたのに」

「涎でてたよ」

「…やだ恥ずかしい。お嫁に行けない」

「じゃあうちにおいで」

「……美弥大好き! 私美弥のお嫁になるーーー」

「はこはこ」

「美弥可愛いなあー」

「智由が一番可愛い」

「…もう、照れるじゃないか!」

「誰かあれどうにかしてよ」

「毎度のことながらあれが普通なのがどうかと思つ」

「ああ…また美弥親衛隊がざわついてる」

「... いじ女校だよね」

「美弥大変ーーー！」

「智由、おはよう」

「あ、おはよう。じゃなくて！大変なのー！」

「どうしたの」

「あのね、あのね。私は見てしまったの」

「…」

「…」

「…何を、とか聞いて」

「何を」

「我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんがね、中央ガーデンにい
らっしゃたの」

「うん」

「おー一人で朝早くからどうしたのかと思つたんだけど」

「おはよう愛里。今日の花当番だけど、昼時間私行くから」

「…むう…美一弥ー」

「聞いてるよ。おー人がどうしたの」

「和葉さんが未羽さんの頬を触つててね…ネズミなのー」

「ネズミ？……チューしてたってこと？」

「うん。いやー…びっくりしちゃった」

「そう」

「麗しかったなー…憧れちゃうなあ

「智由」

「ん？」

「ちゅーっ」

「…」

「…」

「…」

「…」

「えつ…ええええ！」

「先生来る前に英語の予習確認しよつ」

「あ、う、うん。うん」

「智由、それ数学のノートだよ」

「…あれか。でこチューだから許されるのか」

「ここ教室なんだけどね」

「あれは美弥的な嫉妬なんじやないか？」

「あの一人早くくつつけばいいのにね」

「美弥…私もうダメかも知れない」

「どうしたの」

「最近和葉さんと未羽さん観察日記して、すっかり忘れてたけど
もうすぐテストだよー！」

「正確には来週ね」

「美弥…どうしよう。赤点なんかとつたら美弥と同じ白鳳寺なんか
行けーなーいー」

「…頭振つたら髪乱れるよ」

「…直して」

「はいはい」

「あーあ…やだなあ」

「智由」

「ん?」

「智由には私がついてる」

「お?」

「赤点になんかさせないよ」

「おおーさすが美弥！」

「赤点とつたら一週間私のお菓子禁止ね」

「…え?」

「だからお茶会もなし」

「み、美弥ーそれじゃ私生きていけないよー美弥のお菓子がないな
んて…つ！」

「じゃあ頑張りつつへー」

「うんー！」

「さあ、今回の範囲の苦手分野の確認からじょつか」

「手玉にとるつて」、「つとを離すんだね」

「笑顔の美弥つて恐い……」

「美弥のお菓子おやるべし」

「智由が単純過ぎただけだな」

「トリックオアトリートー。」

「はい」

「むぐつ… もぐもぐ…」

「…」

「…」

「…」

「トリックオアトリートー。」

「はい」

「むぐつ… ちよ、 美弥どんだけお菓子持つてきてるの?」「智由がそういうとくると思つたから」

「むむむむ… 悔しい…」

「あ、智由」

「なあに?」

「トリックオアトリートー。」

「…え?」

「お菓子をくれないと悪戯するよ」

「あ、え、ちよちよと待つたー。」

「待つたなし」

「美弥の馬鹿ーー。」触つてゐるーー。」

「あれ、美弥親衛隊なんだ～おはよ～」
「智由様、おはようございます」
「様付けなんかしなくていいのに」

「いいえ、そういうわけにはいきません」
「あ、美弥ならハゲ…じゃなくて森元先生に呼ばれて職員室だけど」
「把握しております。今日は美弥様に用があるわけではございません」

「そなの?」

「このような物で申し訳ないのですが、私が本日実習で作りました
菓子を持参しました」

「いい匂い…凄い美味しそう!」
「もしよろしければ、頂いていただけないでしょうか」
「いいの?」

「はい」

「わー、マフィンだー私の好物だよ!」
「把握しております」

「今日朝ごはん食べ忘れてお腹減つてたんだよね～」

「把握しております」
「チョコとバナナどちらにしよう…悩むなあ…」
「どちらもどちらも。美弥様用のも焼いてありますので」
「本当?私マフィンはチョコとバナナが好きなんだよねー」
「把握しております」

「落ち着いて…！わかるけど、つっこみたい気持ちはわかるけど！何でそんな細かいことまで知ってるのって思つけど…つこんだ瞬間にあんたの人生終わっちゃうから…」

「あれが親衛隊の情報の力なのかな」

「何でも知ってるんだね…」

「よし、ネタキターつ！ これで△△△に間に合つ？…！」

「黒板、わいわい授業中何書いてたのー?」

「アーティストのためのアート」

「まだなあ、
誰にでも見られたくな一歩のはあるでしょ？」

「まさかラブレターとか！」

「授業中に恋文書く馬鹿がいるか！」

「えー違うの? じやあ… 交換日記とか?」

「違います」

んをも…しゃあ…」

「三國志」

「新約全書」卷之三

「あ、あれ。あつが、お出でにならぬ」

Γ

111

111

「な、何？美弥」

一ノミケ頑張て

111

力が学林で生歎打定者の印合を書くときは筆を一に力方にい

「政治小説」

一

「え、何そのすました笑いは何？」

「ちなみに智由のパンツはピンクって書いてたけど今日は水色だか

۱۵۱

「…直つてゐれや」

「革命！」

「ねえ、「ミケって何?」

「知らないほうが良い」ともあるけれど。よし、8流し!」

二〇二

ばんがいへん～長谷川と滝と鈴橋～

「…あ
「何?
「あー、いや。ほり、うちのクラスで有名な蓮川さん
「ああ本当だ」
「あの話つて本当なのかね」
「蓮川さんと八嶋さんが付き合つてるってやつ?
「そうそう。珍しい」とじやないけどね
「結構多いもんね」
「八嶋さんは親衛隊まであるし」
「おつまよーー!」
「おはよ」
「何見てたの?…お、智由たん美弥たんじやんか
「あの一人つて付き合つてるのかなーって話
「付き合つてないよ」
「えつそうなの?」
「うん。智由たん鈍すぎて美弥たんからの戀に気づいてないと思つ
「詳しいね…」
「あ、付き合つて思つ出した」
「何?」
「私恋人できた」
「「えー!?」
「」
「」の学校の子なんだけど
「い、いつの間に!」
「嘘あー!?」
「近々紹介するわ。じゃねー」
「え、まつ…待つてー!」

「……本当に？」

な
な。

「で、何でそんな話になつたの？」

「だつて智由と美弥お似合いだもん」

卷之三

「アーニー、アーニー、アーニー！」

「『」勵弁ぐだきいいハハ

「いやいや、美弥はいいとしても私は無理無理——」

「本人はそこまでくるけど？」

サ
ニ

「頑張りましょーう！ね、美弥！」

一
おも、単純

「Jの組み合せなど学祭優勝も夢しやないね……！」

目錄十一 無米家

「歌曲もお好きですか？」

「まあ…」

一
学祭名々

愛旦

「アリバウド」

「聞いてなかつたの？」

「学祭のクラスの出し物」

一
處
た
よ

「なんど 日本のシナラシイエー。」

「智由、元気だしなつて」
「無理！和葉さんと未羽さんが見てる前でこけるなんて最悪ーー。」
「あれは見事なこけつぶりだつたよねー。」
「でも美弥が咄嗟に抱き寄せたから大丈夫だつたじゃん」
「まあ… そうなんだけど」
「一瞬一人の背後に薔薇が見えたわ…」
「え、何愛里？」
「いいえ、何でも！」
「智由、ここにいたの」
「美弥」
「一那が撮つた写真くれるつて」
「何その束！」
「本当？美弥の歌つてたとこの写真ある？」
「もちろんです」
「…束の写真についてはツツコミになしなのね」
「愛里、気にしたら負けよ」
「おお！よく撮れてるね～この美弥とか凄いかつこいい！」
「この智由可愛い」
「…それ、こけてるとこただけど」
「智由は何でも可愛いよ」
「美～弥～」
「…バカッフル」
「把握しております。お一人ですから」

「そいえば、学祭の写真が売りに出されてたわ」

「ああ…あれでしょ。34番の写真がやたら売れたっていい」

「34番?」

「…客席で手を繋ぐ和葉さんと未羽さんだよ」

「寒いー 学校遠いー」
「結構雪積もったね」
「智由、手袋」
「あ、ありがと。でもこれかたつぽだけだよ?」
「ん」
「…握手?」
「手」
「はい。…わ、ありがと」
「手繋いでコートのポケットに入れるとか、あんたらカッフルか!」
「やだなあ、愛里。美弥なりもつと可愛い子の方がいいでしょ」
「そんなことないよ」
「…や、なんかもう」馳走様だわ
「」飯食べてないのに、愛里何言つてゐの?」
「愛里は少しおバカだから」
「そつか!」
「納得するなよー」フオローリーー
「おはよー」おはこます
「あ、隊長さんおはよー」
「おはよー」那
「…愛里様、手が冷えてます」
「え、あ、ああ…」
「私でよければ手袋を」
「え、悪こよ、隊長さんの手袋だし」
「しかし…」
「一那、じつすれぱいよ」
「そつそつ、繋いでポケットに入れれば寒くないよー」

「一いやー、笑いながら囁つたよ…ひー。」

「…おお、衝撃的な図」

「ついに愛里も染まつたか」

「でも相手が親衛隊隊長なのが意外だわ」

「……見てるこっちが恥ずかしくなるね」

ばんがいへん～鈴橋と田口～

「お、愛里んどした？死んでる」

「…ああ、鈴か」

「珍しいね、机に俯せてるなんて。いつもガリガリ何か書いてるのに」

「あー、うん。まあ、そんなんだけど」

「ミケ間に合わなかつたの？」

「いや、こないだ出した新刊はバカ売れして今増刷中よ……つてか何でミケを知つてるの…？」

「とある眼鏡さんからの情報デス！」

「美弥だろ」

「あれま、あんま驚かないんだね？」

「慣れたよ。慣れなくなかつたけど慣れたよーそりゃ半年一緒にいればそろそろわかつてくるわ」

「おー流石、愛里。慣れたね」

「いや、むしろつっこむべきは美弥の情報力でしょ…」

「あ、じゃああの噂も本当？」

「噂？」

「愛里がこの学校に染まつてきただつていひ」

「この学校つて…」

「ま、要約すると朝からまさかの親衛隊長トイチャトイチャしつぶお

つ」

「鈴、お口チャック」

「うおお」

「つじかもう噂になつてゐるのか…つー」

「あーびっくりした。口掴まむのは反則でしょ」

「……」

「あれ、おーい愛里やーん?」

「…………」

「愛里は死んだように俯せた!」

「…もうつむく氣力もないわよ」

「ええ、つまんないよーってかこの学校では珍しくないでしょ」

「私外部生だもん」

「そつか、高校からだと理解しにくいかもねー」

「鈴はどうなの?」

「私?私は別に好きならいじやん意見です」

「…ああ、そつ」

「もしかして朝から暗いのは、そのひとつとして考えてた?」

「…だつて」

「…だつて?」

「…あー」

「…………」

「…………」

「…………」

じゅい。(前書き)

いつの間にか乙女白百合を連載して一ヶ月たちました。
評価を下さった方、お気に入り登録してくれている方々本当にあり
がとうござります。大変励みになっています！
これからもよろしくお願いいたします(、、*)

「美弥ー」「何」「見て見て、雪だるまー」「ナチュラルに何教室に持ってきてるの……」「どこにいったかと思えば」「えへへ～朝雪積もってたからさ」「くすっ。鼻真っ赤」「でも教室だと確実に溶けるよ」「……どうしよう愛里！」「考えてなかつたんかい！」「智由、仕方ないけどこの子を元の所に帰してあげよ？」「…美弥」「作つて見せてくれて嬉しかつたよ。だから帰してあげよ？」「うん」「じゃあ…向坂、窓開けて」「は、はー」「…ふー」「何故投げた！？」「ばこばこ雪だるま作るー」「さよなら」「え、投げたのはいいの…？感動的な別れみたくなつたけど、もうき思つつきり投げたよね？」「愛里、何か言つた？」「いえ何もおー…」「美弥、今度おつきな雪だるま作る？」「うん。その前に体冷えたから、あつたまつて」「……」

「大丈夫だ愛里、つっこみたいのはあんただけじゃない」

「長谷川ああ」

「あ、愛里が浮氣してるー美弥美弥、[写真撮つて隊長さんに送るー」

「まかせて」

「浮氣なんかしてないわ！」

「いーい放物線を描いて落ちたね、雪だるま」

「流石美弥だわ」

「お、親衛隊が浮氣を聞き付けて集結してる」

「…愛里、ガンバ」

「あ、あ、あ、あの」
「あ、おはよひ、向坂ちゃん」
「お、おはよ、「ハ。ハ嶋ち、ん」と、聞き、聞きたいことがあつて」
「何ー？」
「あの、その…」
「うん？」
「す、好きひ、ヒツヂ、てわかつたの…？」
「…ん？」
「は、蓮三さん、」とを、な、な、何で好きひ、わかつた、の
「？」
「…好き？」
「う、う、うん」
「…好き」
「…？」
「嘘お…」
「や、ハ嶋さん？」
「…あー私美弥の事、そういうひとで好きなわざじやないんだ」
「あ…」
「だから向とも言えないんだけど…多分、ずーっと側にいたいなあと
とか、こいつ向いて欲しいなあとか、段々相手の事をたくさん考え
るようになつたら、それが好きになつたつて事だと思つ」
「相、手のひ、事を考え、る…」
「…うん」
「あ、あ、ありがと、「」
「うん、参考になるかわからんけど」
「そ、そ、それ、じゃあね」

「じゃーねー」

「……私が、美弥を、
……」

「痛つ」
「おはよみつ愛里」
「……おはよみつ美弥。雷王ぶつけなくてもいこじやん……なんか、
元氣ない?」
「……まあね」
「智由と喧嘩でもした?」
「してない」
「だよね、するわけないね……。でも最近朝一緒にやないよね」
「多分」
「……多分?」
「避けられてる」
「嘘!え、智由が?」
「うん」
「何で?」
「さあ?」
「……わあつてあんた……」
「避けたい理由があるならしつつがない」
「そただけど……でも」
「一人ともおはよー」
「おはよー」
「……あれ愛里さん何か今日の美弥さんは静かだね」
「やうなんですよ長谷川さん。今日の美弥さんは静かなんですよ」
「……そんなにわかりやすい?」
「わかりやすいつてか、智由いないし、美弥の愛里への毒舌がない
し」
「……長谷川、判断基準を間違えてないか?」

「あはは。まあ元気出してね！」

「ちょ、長谷川！笑つてごまかすな！」

「私を捕まえてごらーん」

「待てこらー！」

「……一人とも、ありがと」

「いやあ、いいよねー」
「それに関しては否定しないわ」
「……鈴と長谷川…鈴長谷か」
「愛里ん、こいつ見てどした?」
「えついや、何話してるのかなと思つて」
「ああ…向坂ちゃんの胸のサイズが羨ましいって話」
「横の席から見てたんだけど、あの調度いいサイズいいよねー」
「あんたたちねえ」
「愛里はあんまないよね」
「放つておけー！」
「よしよし」
「ハセにくつこしてたらまた浮氣だーって騒がれるよ」
「……嫌な忠告ありがとつ」
「まあ変な話、有澤のは大きすぎるよね」
「あー、わかる。肩疲れそうだよね、有たんのは」
「有澤…？」
「隣のクラスのシンデレラ女王」
「真白ちゃんに相手にされなくて、一度食堂で大暴れしたんだよねー」
「ああ、あの喋り方変わってる子か」
「そうやつ。八嶋さんと仲良いらしきけど」
「同じ中学だつて。智由たんと言えばここ最近静かだよね」
「何か、美弥のこと避けてるみたい」
「嘘あ、蓮川さんを?」
「読めた…読めたよー」
「……何急に」

「遂に」、智由たんが美弥たんへの気持ちに気づいたんだよー。どうじよつ...私こんなに好きだったんだ...恥ずかしくて美弥の目が見れないわきゅるるん...」

「きゅるるんって」

「あ、あ、あの.....」

「ありえるかー？凄い今更感があるけど」

「あ、あれ、あ、の、あのー」

「つか、どうやつて気づいたんだって話だよね」

「.....あ、あ、」

「じゃあやつぱつや」

「あのーーー」

『.....向坂?^{むこうざん}』

「で、何の用ですの」
「ううー……」
「珍しく顔を出したと思えば……」
「まあまあ、いこじやないたまには」
「いつもは美弥さんにべつたりじやありませんか」
「……今はこう、一緒に居づらこといつかー」
「困った幼なじみですわね。まあ、久々に話す」ともじりこます
「ありがとうアリスー！」
「……そのあだ名辞めません?」
「え、何で。可愛いよ」
「この歳にもなつてアリスと呼ばれるのは複雑ですわ」
「だって金髪だし、昔アリスみたいな水色のワンピース着てたじやんか」
「へえ～その話詳しく聞きたいなあ」
「……誰?このイケメンさん」
「離乃の恋人です。よろしくね智由ちゃん」
「違いますわ!誰が恋人ですか!」
「またまた照れちゃって。ほーんと、可愛いなあ」
「冗談が過ぎますわよ、佐藤」
「……あー、何か何となくわかつたよ」
「わかつてほしくありませんでしたわ……」
「困つてる離乃も可愛いっしょ?」
「その口を閉じなさい!」

「お、智由たん」

「あ、鈴」

「……えと、向ひの凄い騒動はこいの？有澤さん椅子投げてるけ
ど」

「……嘘、悩みを抱えて生きてこりなんだよ」

羽は舞い葉は散る。～それは消えていく時間の傍らに～

泣き虫な私も
嘘つきな私も
臆病な私も

愛してくれて、ありがとう。

さよならが言えない私を、どうか許して。

「どうだ、素敵な人だろう」

「和葉には勿体ないくらいだわ」

目の前で笑っている人達が他人のように見えるのは、どうしてだろう。

「よかつたな」

「…何が？」

私はぼんやりと、自分の親を田に写した。

「変な顔してる」

抓られた頬の痛みに気づいた時、田の前にはいつの間にか笑っている少女が、いた。

覗き込む様に顔を前に出してきたので、ポニーテールにした髪がさらさらと流れた。

「和葉？」

「嗚呼。ここは学校だ。」

放課後になつても動かない私を、ずっと待つてくれたんだろう。

夕日に照らされた細い睫毛と、リップで濡れた唇と、少しきつめに
流れる瞳を見た時、私はやつと声が出せた。

「……未羽」

「ん？」

名前を呼べば、返してくれる、私の親友。

「……未羽」

まるで、それしか言えないように私は未羽の名前を繰り返した。

未羽、未羽、未羽、未羽、未羽……

未羽は何もいわず、ずっと私の手を握ってくれた。
その優しさが嬉しくて、悲しくて。
手に入らないとわかつてしまつたから。
心が叫び続けていた。

羽は舞い葉は散る。～影は離れることなく伸びていく

何故だろつ。

たまに和葉がいなくなつちゃうんじゃないかと、思つのは。

「未羽さん、よければ食べてください!」

廊下を歩いていると、下級生がクツキーを差し出してきた。

……チヨコクツキーか。

「ありがと」

笑いながら受け取ると、下級生は友達と騒いだ後、頭を下げて廊下を走つていった。

健気だねえ、女子は。

クツキーを片手にうちは、外へと向かつ。

「……」めんね

ぽつりと呟いて、焼却炉にクツキーを投げ入れた。ついでに、朝靴箱に入っていた手紙も燃やす。燃えたのを確認して、また足を校舎へと向けた。

愛するのも、愛されるのも一人だけでいい。

たつた、一人。

何を犠牲にしてもいいから、手に入れたい人がいる。

うちの世界は、その人だけでいいのに。

「本当、雑音が酷い」

全てが、雑音だ。

「和葉？」

教室を空ければ居るはずの人の姿はなく、がらん、とした空間だった。

和葉がいない。

「

たつたそれだけで、胸が騒ぐ。

頭はすぐに、和葉が行きそうな場所を探しだし、体は教室の外へと足を進める。

「あ、未羽」

廊下を走り出そうとした時、向こうから歩いて来る姿に足が止まる。

「部活お疲れ様。」めんね、先生に呼ばれてて
女子にしては少し高めで細い声が、廊下に響いていく。

「いやあ、どこ行つたかと思つたじやん

笑いながら、うちからも和葉に近づく。

ショートボブの髪に隠れるように大きな瞳と薄い唇が見える。

……キスしたい。

そう思いながら、小さな身体をそつと抱きしめた。

何処にも行かないで、私の鳥。

羽は舞い葉は散る。～空気がないなら貴方のを下さ～

苦しいね。

まるで水の中にいるみたいに。

息ができない肺の苦しさが、私に生きてる事を教えてくれる。

カリカリ、とシャープペンシルが走る音がする。

「あ、そだ。バナナクッキー食べたい」

「バナナクッキー？」

「うん。和葉が作ったやつね」

突然顔を上げて真剣に言つたと思えば、そんなことだつた。

「わかった。次の休みね」

「やつた」

えへへ、と嬉しそうに笑う未羽を見ていたら、何だか私も嬉しくなる。

またシャープペンシルを持つと、広げていたノートに影が写つた。

「あの……」

もじもじと手を動かしながら声をかけてきたのは、隣のクラスの子だつた。

咄嗟に未羽を見ると、眉間に皺を寄せながら女の子を見上げていた。静かな図書室に囁くような声が左右に生まれる。

「……向こうへ行こう」

立ち上がりて女の子と図書室を出ていく未羽の後ろ姿を見ながら、どうしようもなく辛くなつた。

ノートに視線を戻しても、中々集中できなくて。

目を閉じれば、片隅にある人の顔を思い出した。

「和葉には勿体ないくらいだわ」

「よかつたな」

止めて。

「始めてまして」

止めて。

「和葉さんですよね」

止めて。

「よろしくお願ひします」

笑わないで。

優しくしないで。

溺れて息が出来ないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8249x/>

乙女は白百合の箱庭に

2011年12月21日15時45分発行